

元曲の世界へようこそ

牧野 格子



A5判 432頁
 東方書店
 [本体 4200円 + 税]

後藤裕也・西川芳樹・
 林雅清編訳
 中国古典名劇選

「東^{とう}西^{せい}東^{とう}西^{せい}、ここに^{ここに}お披露目いたしまするは、かの中国^{ちゆうごく}は元^{げん}のご時世^{ときよ}、広く巷^{ちまた}で人^{ひと}氣^きを博^{ひろ}したお芝居^{しばい}「元^{げん}雜劇^{ざげき}」でございます。」

と、魅力的な前口上のはしがきで始まる本書『中国古典名劇選』は、元曲の普及を目的に集まった三人の若手研究者たちによる努力の結晶である。

元曲は元雜劇ともいわれる。北宋の「勾欄」と呼ばれる演芸小屋で演じられた雜劇を起源とし、元代に至って北方で盛んに行われた。そのテキストは、元刊本と呼ばれる元代のものが最古であるが、そこにはほとんどセリフがしるされていない。明代に至り、優れた元曲百種を選んで刊行された『元曲選』は、読み物（レーゼドラマ）として最初に世に現れた

ものである。

本年、二〇一六年は『元曲選』の刊行四百周年に当たる。『中国古典名劇選』はまさにその記念すべき年に出版された貴重な翻訳書なのである。

編訳者の後藤、西川、林の三氏は、関西大学文学部の井上泰山教授の指導のもと、元曲研究に研鑽を積んだ若手研究者である。三氏は、日頃の学恩に報いるため、元曲の翻訳集出版を思い立ち、二〇一一年「芳藤林読曲会」を始めた。二年後、草稿は完成していたものの、昨今の厳しい出版事情により、なかなか最後の一步を進めることができなかったという。さらに二年後、中国伝統文化に関する研究助成事業を行う一般財団法人橋本循記念会の出版助成に応募し、見事に採用され、出版にまで漕ぎつけた。三氏のここまでの努力に驚嘆す

ると同時に称賛の辞を送りたい。

本書収録作品は以下の通りである（カッコ内は作者名と訳者によるジャンル名）。

- 一、趙氏孤児（紀君祥、「歴史劇」）
- 二、瀟湘雨（楊顯之、「才子佳人劇」）
- 三、東堂老（秦簡夫、「世話物」）
- 四、曲江池（石君宝、「才子佳人劇」）
- 五、梧桐雨（白仁甫、「歴史劇」）
- 六、勘頭巾（張仲章、「公案劇」）
- 七、黄粱夢（馬致遠、「神仙道化劇」）
- 八、忍字記（鄭廷玉、「神仙道化劇」）
- 九、金線池（閔漢卿、「才子佳人劇」）
- 十、盆兒鬼（無名氏、「公案劇」）

本書は、一般の読者向けに出版された。それゆえ、細部にわたって理解しやすいように工夫が凝らされている。それは巻頭に載せられた「凡例」、合間に挟まれた「コラム」、各作品に付された「解説」である。

「凡例」では、次の事柄が簡単に説明されている。元雜劇の構成に関する説明、つまり今日の芝居という幕にあたる

「折」、冒頭あるいは幕間に状況説明のために置かれる「楔子」、演技を構成する要素である「白（せりふ）」「曲（うた）」「科（しぐさ）」「脚色」と呼ばれる「末（男役）」「旦（女役）」「淨（敵役）」「丑（道化役）」「外（脇役）」などの役柄についてである。コラム①では「曲」、コラム②では「脚色」、コラム③では「ト書き」と「しぐさ」、コラム④では「元雜劇が扱う作品の種類」について詳しい説明がなされている。

特にコラム①の「曲」の説明が出色である。中国伝統演劇になじみのないものにとつて最も分かりにくいのが、この「曲」であろう。しかし、伝統劇鑑賞の肝である「聴戲」、つまり劇を「観る」のではなく劇を「聴く」ものであることを前提に、「曲」がそれにどれほど深く関わっているかを述べている。「曲」は劇中で歌われる韻文であるが、三百三十五種の型があり、ここでは「点絳唇」を例にとつて説明している。古典詩と同じく句形が定まっておリ、句ごとに字数と平仄、押韻の有無が定められている。ミュージカルのようにメロディーに乗せたセリフが合間に挟まれていると考えれば、理解しやすいのではないだろうか。

コラム①の最後は、「本書の曲部分を読むときは、舞台上で高らかに心情をうたい上げる役者の姿を想像しながら読んでもらえればと思う」と締めくくられている。読者の想像を

かきたてるためには、七五調で訳されたこの曲部分において、訳者の力量が試されるのではないだろうか。

体裁の上でも工夫がなされており、現代の脚本形式に似せて整理されている。ゆえに現在の台本形式に慣れた我々読者にとっては非常に分かりやすい。原本テキストである『元曲選』はこの形式で書かれているわけではない。ここでも訳者三氏の行き届いた配慮が垣間見られるのである。

*

*

*

収録された十篇は、ジャンルと作者によって選ばれた。前述のコラム④では、『元曲選』収録の百作品の中から偏りを防ぐために「才子佳人劇」「公案劇」「神仙道化劇」「歴史劇」「世話物」のジャンルを立てて、それぞれの特徴をよく示す作品を選出したと書かれている。復讐譚として余りにも有名な「趙氏孤児」が収録されているが、これは、「梧桐雨」と共に「歴史劇」に分類されている。他に「才子佳人劇」は、所謂恋愛もので、各作品男女各々の視点から描かれており、現代の我々にも感情移入しやすい。「公案劇」は所謂裁判もので現代のミステリー作品に近いという。実際に読むと話の展開にハラハラする。「神仙道化劇」は、道教、仏教および民間信仰に

取材した劇である。本書収録の「黄梁夢」や「忍字記」は俗世のしがらみを逃れ神仙の世界へ入っていく経過を楽しむことができる。「世話物」は一作品しか収録されていないが、「東堂老」は元代当時の市井の様子が窺い知れる作品である。

日本語に翻訳する際、相当な苦勞があったに違いない。当時の口語から当時の雰囲気壊すことなく翻訳するならば、それに相当する適切な日本語の言葉を選ばねばならない。編訳者の三氏は雰囲気損なうことなく、見事に元代の舞台の世界を再現している。

これら収録作品の中で、印象に残ったものを一つ挙げてみよう。

「梧桐雨」は、過去に青木正児による翻訳（『元人雜劇』青木正児訳註、春秋社、一九五六年）があるが、本書で同作品の新たな訳出が試みられた。同作品は、正式名称を「唐明皇秋夜梧桐雨」といい、唐の玄宗と楊貴妃の物語である。玄宗と楊貴妃の蜜月から、安史の乱を経て、楊貴妃を失った後まで、壮大な歴史と運命に翻弄される人生の物悲しさを描いた傑作である。

後に『青木正児全集』に再録された「梧桐雨」と比べてみると、勿論言葉遣いに時代の違いが現れているが、本書の翻訳にはそれ自体の際立った良さが現れている。この作品の前半部分は、安祿山の登場から反乱を起こすまでの歴史的背景

や玄宗と楊貴妃の情交を描いている。最後の第四折で楊貴妃を失った玄宗が悲愴な思いを切々とつたい上げる姿は、前半部分と見事なコントラストをなす。これらの場面をセリフの部分は現代にも通じるよう比較的口語調で、曲の部分はやや文語調で、韻文の格調を失わぬように訳されている。文語調になじみのない現代の人々にも理解できるよう、絶妙な工夫がなされているのである。

評者は、中国近現代文学を学ぶ者として、中国古典小説や伝統演劇に触れる度、心理描写に関する疑問を持つ。何故、動きや出来事の描写が多いのか。演劇という性質によるものなのか。「梧桐雨」の玄宗が自らの心情を歌いあげる悲痛な場面を見ると、「曲」という心情を十分に表現する場があるのを確認できる。心理描写では古典文学と現代文学の間では

異なる要素があるが、そこには必ず共通する点もあるだろう。ゆえに古典文学と現代文学の連続性を見出すことができるのではないだろうか。

*

*

*

以前、評者自身も中国文学史の講義を担当したことがある。元曲に関しては、プリントを配布しながら一通りの説明はしたが、学生に興味を持たせるところまでは至らなかった。編訳者の三氏も中国文学関係の講義を担当しながら、大いに苦勞していることと推察する。

今回の翻訳本を、各大学での中国文学関係の講義に供することができれば、学生たちの中国文学に対する興味や理解が

□新刊□

中国語と日本語における 目的表現の対照研究

戦慶勝 著 日本語と中国語の目的表現の枠組みや形式間の結びつきを、個別研究と対照研究によって追究。さらにその成果を第二言語習得研究に活かす可能性を探索する。 ■7800円

山口大学大学院東アジア研究科 東アジア研究叢書③ 東アジア伝統の継承と交流

国立大学法人山口大学大学院東アジア研究科 編著
馬彪・阿部泰記 編集責任

東アジア伝統の継承と交流を解明。都市文明・郷土祭祀・文化記憶・英雄塑像・泰山民俗・海女文化・伝統芸能・貴族物語・伝記表現・民間宣講・団塊世代・振分文化・華夷意識・古音韻観などについて日本・中国・韓国・台湾の気鋭の研究者の成果を収める。 ■4500円

白帝社

※価格は税別

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

さらに深まるのではないか。また本書によって、学生たちの柔らかな感性と想像力が刺激され、新たな見識や観点が生まれてくるのではないだろうか。例えば、収録作品の「瀟湘雨」において、当時の女性をめぐる今と全く違った価値観について取り上げれば、大いに学生から意見を引きだせるのではないか。議論へと至れば、学生たちの思考も深まり、教室も活気づくだろう。教材としても大いに活用できる。

故・日下翠氏は、かつて『わかりやすくおもしろい中国文学講義』（九州大学中国文学会編、中国書店、二〇〇二年）で、「中国伝統演劇のおもしろさ」という一文を書き、楽しさを分かりやすく伝えた。日下氏はその中で、中国伝統演劇は「聞く」ものだと述べている。

それは、たびたび芝居が禁止され、閉鎖を余儀なくされた芝居小屋が法の目をかいくぐって、飲食する店の片隅で演じられたことによる。だからこそ、そこは演者の力量が試される場であった。一見芝居を見ていないようにみえて、実際は「聞く」ことで鑑賞するため、演じる側はまず「唱（うた）」「念（せりふ）」「做（しぐさ）」「打（たちまわり）」の四つの技量を磨かねばならない。名優と呼ばれる演者は、その歌声で観客を感動させる。また数秒のしぐさに十数年分の修業の跡を込めた芸が惜しみなく発揮される。これらの芸を目の当たりにでき

るのが中国伝統演劇の魅力だという。

今回の『中国古典名劇選』のスムーズな訳を読み進むにつれ、目の前には演者たちの生き生きと演じる姿が浮かび、まるで当時の芝居小屋で実際に演目を見ているような錯覚に陥る。本書はまさに当時の演者が磨き上げた芸でもって演じ上げる姿を読者に自然と想像させる。まさに、この点で本書は成功している。

本書からは三氏の大学院時代から今までの努力や苦労、その結果得られた達成感や喜びを感じ取ることができる。単なるレーゼドラマに留まらない深みと魅力が本書には凝縮されているのだ。

古くは中国の王国維、日本では鹽谷温、青木正児、吉川幸次郎、田中謙二らが偉大な業績を残し、またその研究の完成を見ずしてこの世を去った。その偉業を継ぐ者として、引き続き三氏の努力に期待したい。

（まきの・のりこ 國學院大學）